

平成17年度

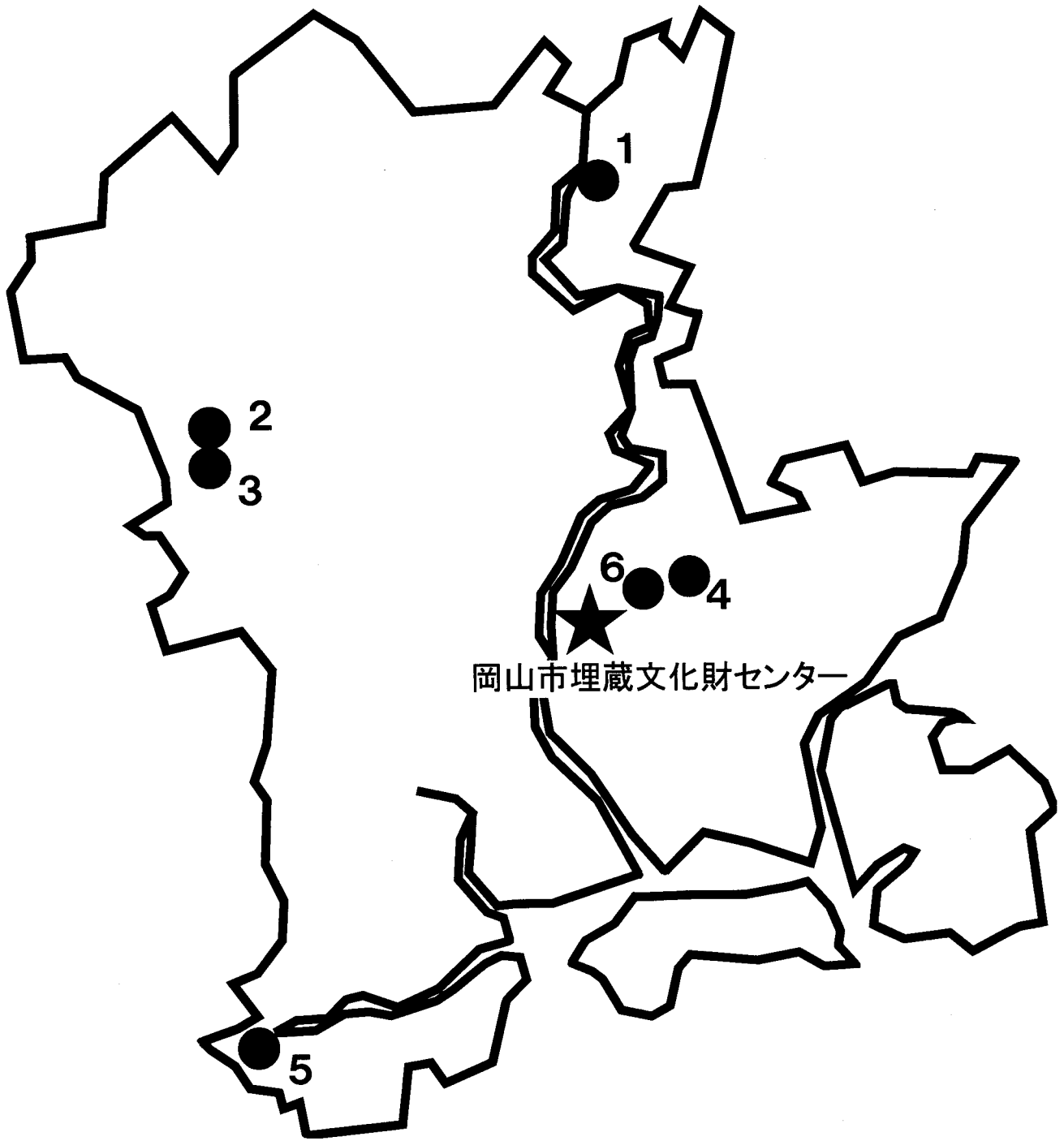
岡 山 市

埋 蔵 文 化 財 速 報 展

と き 平成17年10月31日(月)～11月2日(水)

と ころ 岡山市役所1F 市民ホール

岡山市埋蔵文化財センター



- 1 熊谷城跡**
- 2 一国山城跡・古墳群**
- 3 南坂8号墳**
- 4 東岡山(市道)遺跡**
- 5 彦崎貝塚**
- 6 兼基遺跡**

- 岡山市御津矢原**
- 岡山市下足守**
- 岡山市下足守**
- 岡山市下**
- 岡山市灘崎町彦崎**
- 岡山市兼基**

くまたにじょうあと 熊谷城跡

岡山市御津矢原

御津矢原の城山(金川大橋から北東に見える採石場)にあった連郭式の山城で、当時の備前の一大勢力である松田氏の拠城、金川城の出城として築かれたようです。城主としては、榑村亦次郎が記録されていますが、詳細は不明です。

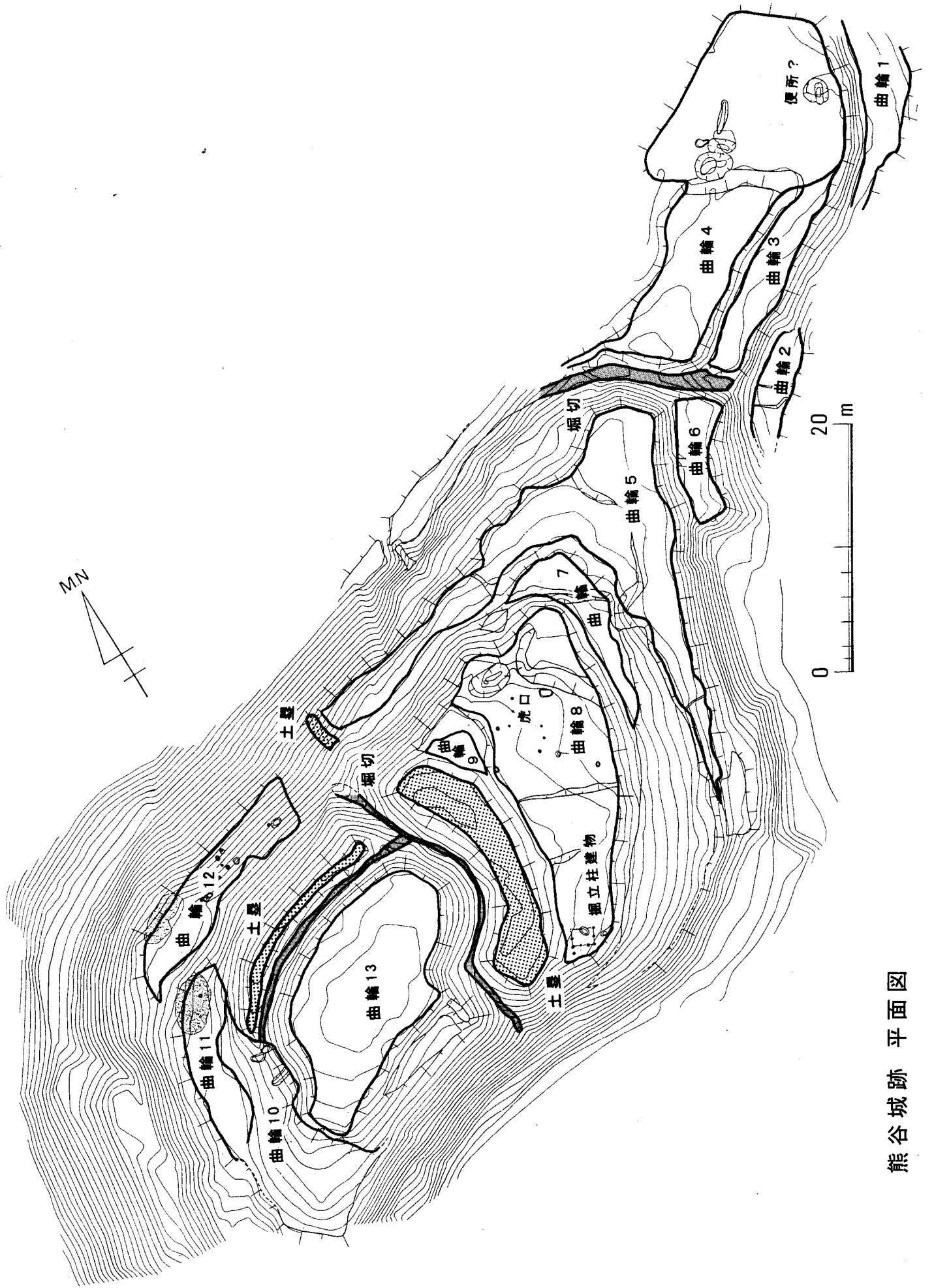
城跡は標高238mの山頂に築かれ、長さ約34m、幅20mの長円形の主郭から東と南に曲輪が連なっていました。南のものはほぼ消滅していましたが、東に延びるものを1996(平成8)年に調査しました。

調査地内には13の曲輪がありましたが、曲輪4・8・12の土坑、曲輪8の掘立柱建物のほかには、目立った遺構はありませんでした。また瓦も見つかっていないことから、板葺きの簡単な建物を建てていたようです。

遺物は13世紀後半から15世紀前半に位置付けられる備前焼の大甕がほとんどでしたが、備前焼の播鉢、瓦器の土鍋、土師器の羽釜・皿・椀、瀬戸焼のおろし皿・椀などもありました。また、鍬先、鉄釘、鉄鍬、銅製飾り金具、硯等も出土しました。曲輪11、12からは炭化米(焼けた米)が多量に出土しました。

従来、中世の山城は『砦』的な性格をもち、有事に際して立て籠もるためのものと考えられていました。しかし熊谷城跡からは、今回の調査で整理箱50箱分もの遺物が出土したことや、貯蔵器だけでなく日常生活品が出土したことから、ある程度の人員が、城内で生活していたことがうかがえます。

また、金川城からは、松田氏と敵対していた浦上氏の勢力の範囲である、現在の赤磐市からの進入路である山口峠が死角になることから、熊谷城はその死角を補う役目を負っていたようです。さらに、旭川とその支流である新庄川、宇甘川の合流点を、金川城とで挟撃する役目を果たしていたのかもしれませんが。



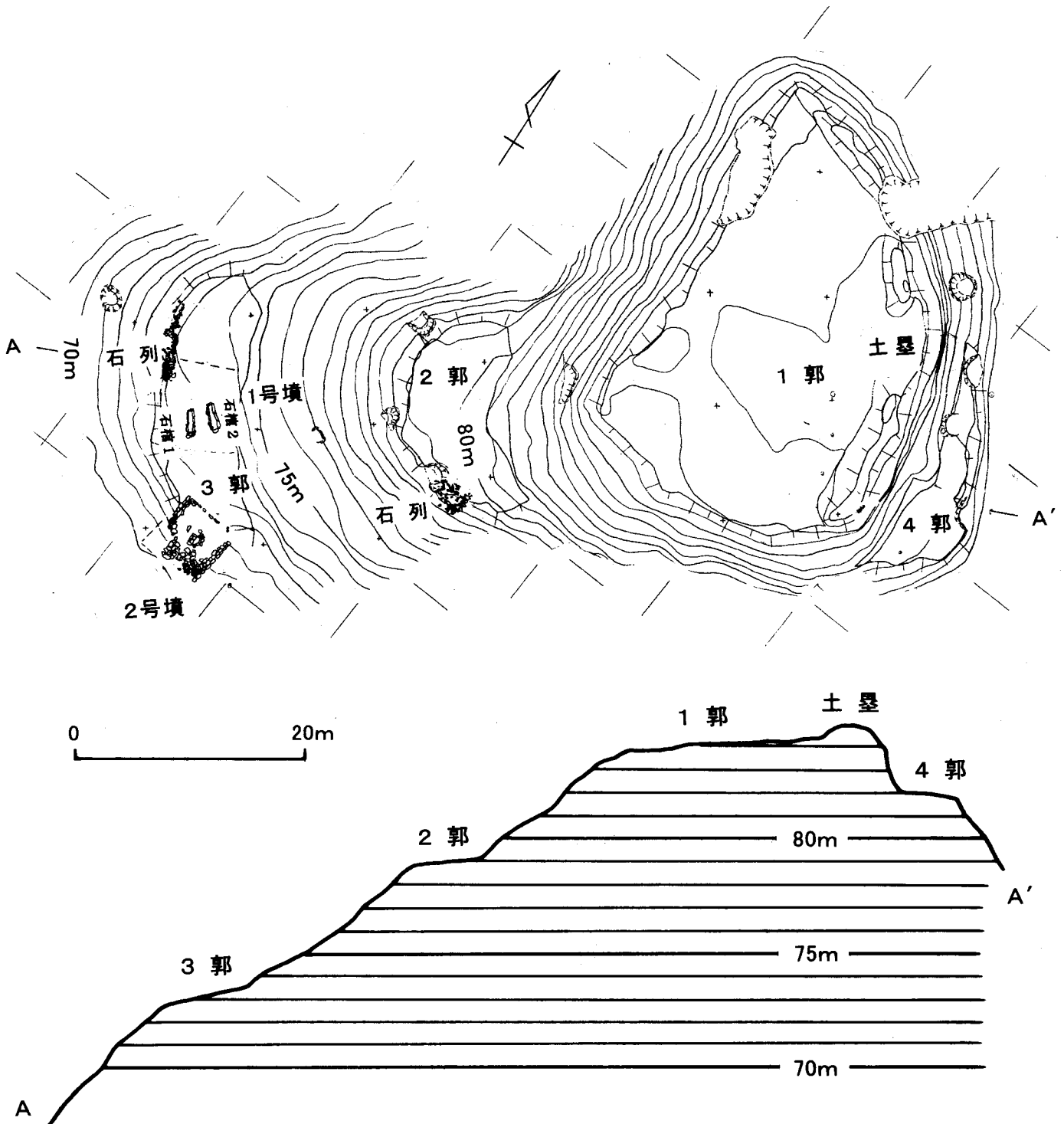
熊谷城跡 平面図

いっこくやまじょうせき こふんぐん
一国山城跡・古墳群

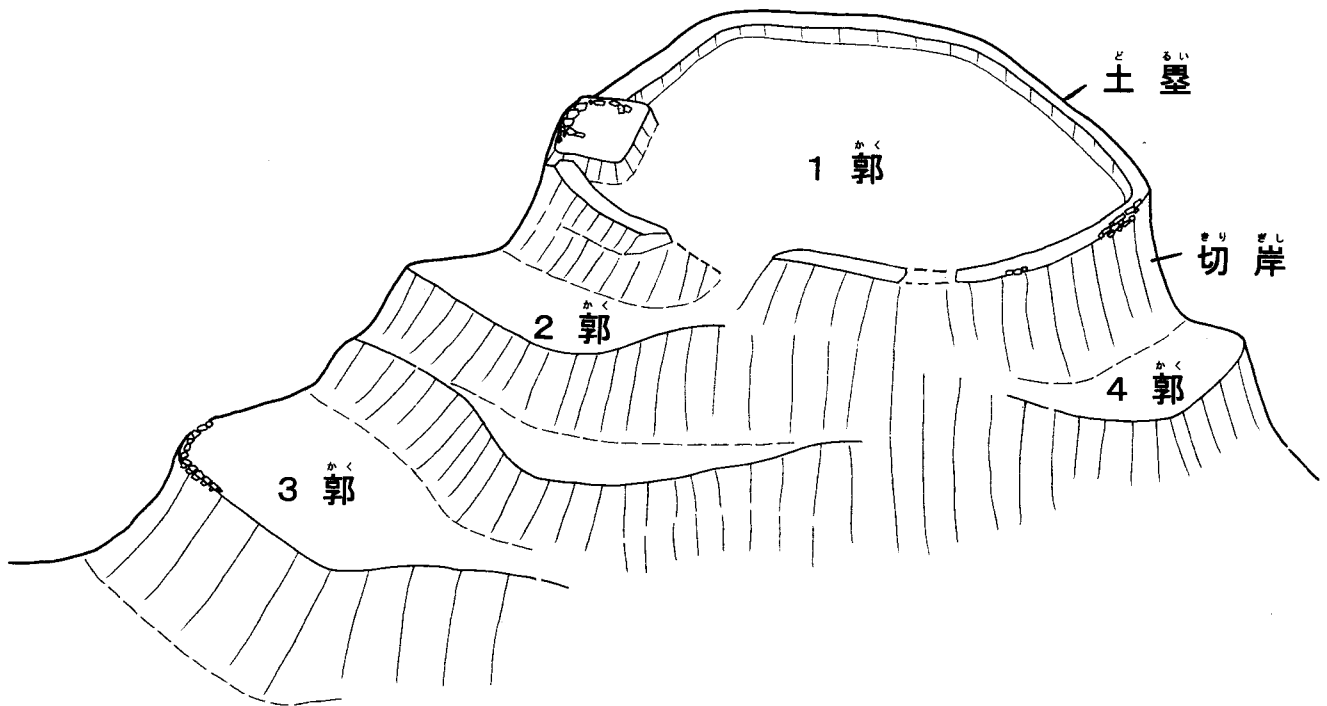
岡山市下足守

一国山城跡

標高約85mの一国山頂上を平らに造成し、主郭(1郭)としています。さらに主郭を中心に、南西方向にのびる尾根上に2段(2郭・3郭)、東側の急斜面上に1段(4郭)の合計3つの「郭」を造っています。また、頂上の平坦面の東端には、土を帯状に高く盛り上げ「土塁」が造られていました。「土塁」の下側の斜面は特に急角度になっており、「切岸」が造られていたようです。「郭」の端には石を並べて簡単な土止めの施設が造られていたようです。



一国山城 地形測量図



一 国 山 城 模 式 図

そのほか、火を焚いたと思われる地面が赤く焼けた場所や、石で周囲を囲った穴も見つっていますが、建物の跡は見つかりませんでした。とても簡単なつくりの城だったのかもしれませんが。

元和元年(1615)に著された『中国兵乱記』の記述には、天正十年(1582)、当時中国地方の支配者であった毛利氏と争っていた織田信長が、毛利方の城である冠山城を攻める際、軍勢を集めた場所の一つとして「一国山の峰」の名前が挙がっています。「一国山の峰」は一国山のことであろうと思われます。

城を造ったときに造成した土の中からは、主に室町時代の備前焼、亀山焼などの陶器、銅銭や釘などがみついています。このことから、城ができる以前から、一国山には人の手が加わっていたと考えられます。

一 国 山 古 墳 群

一 国 山 城 の 一 番 南 西 の 郭 (3 郭) と その 西 側 の 尾 根 筋 から、5 基 の 古 墳 が み つ か り ま し た。こ れ ら の 古 墳 は 今 ま で に 知 ら れ て い な か っ た も の で、新 た に「一 国 山 古 墳 群」と 命 名 さ れ ま し た。

● 一 国 山 1 号 墳

第 3 郭 から み つ か っ た、2 基 の 箱 式 石 棺 を 埋 葬 施 設 に 持 つ 古 墳 で す。ゆ り い 斜 面 を 平 ら に 削 り だ っ て 造 ら れ た 古 墳 と 思 わ れ ま す。

2 基 の 石 棺 の う ち 一 基 は 未 盗 掘 で (石 棺 1)、中 に は 鉄 刀 が 二 振、ガ ラ ス 玉、勾 玉 や、管 玉 な ど が 副 葬 さ れ て い ま し た。ま た、周 囲 の 地 形 と、古 墳 と を 区 画 す る 溝 の 中 か ら は、被 葬 者 へ の 供 え 物 と 考 え ら れ る た く さ ん の 土 器 が み つ か り ま し た。時 期 は、こ れ ら の 土 器 の 年 代 か ら 5 世 紀 後 半 頃 と 思 わ れ ま す。

●一国山2号墳

第3郭^{かく}の南側斜面から見つかった、一辺5m程^{ほうぶん}の方墳です。古墳と周囲の地形とを区画するために、墳丘^{ふんきゅう}の端に石を並べています。

埋葬施設^{まいそうしせつ}は、かなり壊されていてはつきりとはわかりませんが、幅約1.2m長さ2.5m以上の横穴式石室と思われます。床には平らな石が敷かれていたようで、周囲から鉄釘が見つかることから、この敷石の上に、木棺がおかれていたのでしょう。

年代を示す遺物^{いぶつ}は出土していませんが、古墳の造りから、7世紀中頃^{あすかじだい}(飛鳥時代)の古墳と考えられます。この時期、古墳は畿内政権^{きないせいけん}の許可なく造ることはできなかったと思われ、この古墳に葬^{ほうむ}られた人は、畿内政権と何らかの関わりがあった人と考えられます。

●一国山3号墳

一号墳から約20mほど離れて見つかり、斜面を方形に削りだしてつくられた古墳と思われます。埋葬施設^{まいそうしせつ}の箱式石棺^{はこしきせつかん}は尾根筋と平行しています。

石棺の中からは、管玉・鏡の破片・石杵^{くくだま いしぎね すいぎんしゆ しんしゆ}(水銀朱[辰砂]を精製するのに用いられた石器)と思われる石器などが出土しました。

●一国山4号墳

3号墳の西側に見つかった、斜面を円形に削りだし、その上に盛土をおこなってつくられたと思われる古墳です。古墳の上には、尾根筋に平行してつくられた箱式石棺^{はこしきせつかん}が3基、平行に並んでいました。

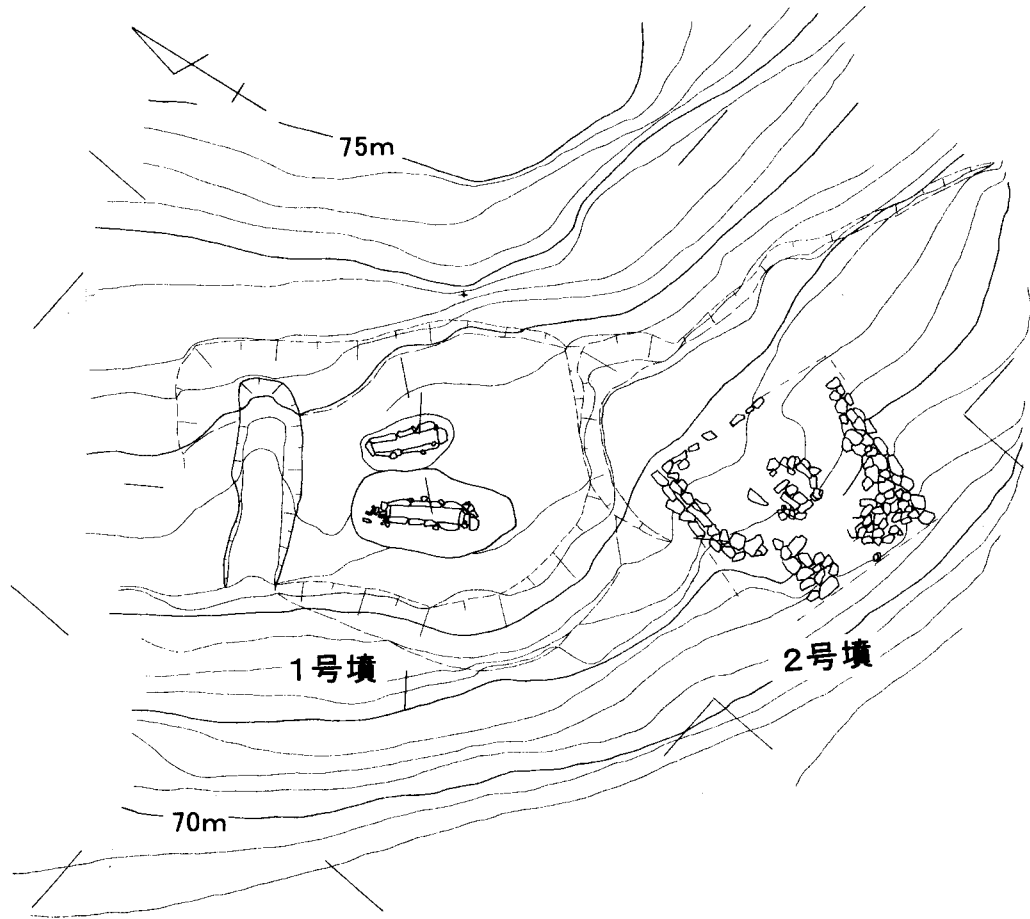
どの石棺にも、被葬者^{ひそうしや}の頭をのせる枕石^{まくらいし}が置かれていました。また、床に石を敷き詰めている石棺もありました。しかし、3号墳のような副葬品^{ふくそう}は出土しませんでした。

●一国山5号墳

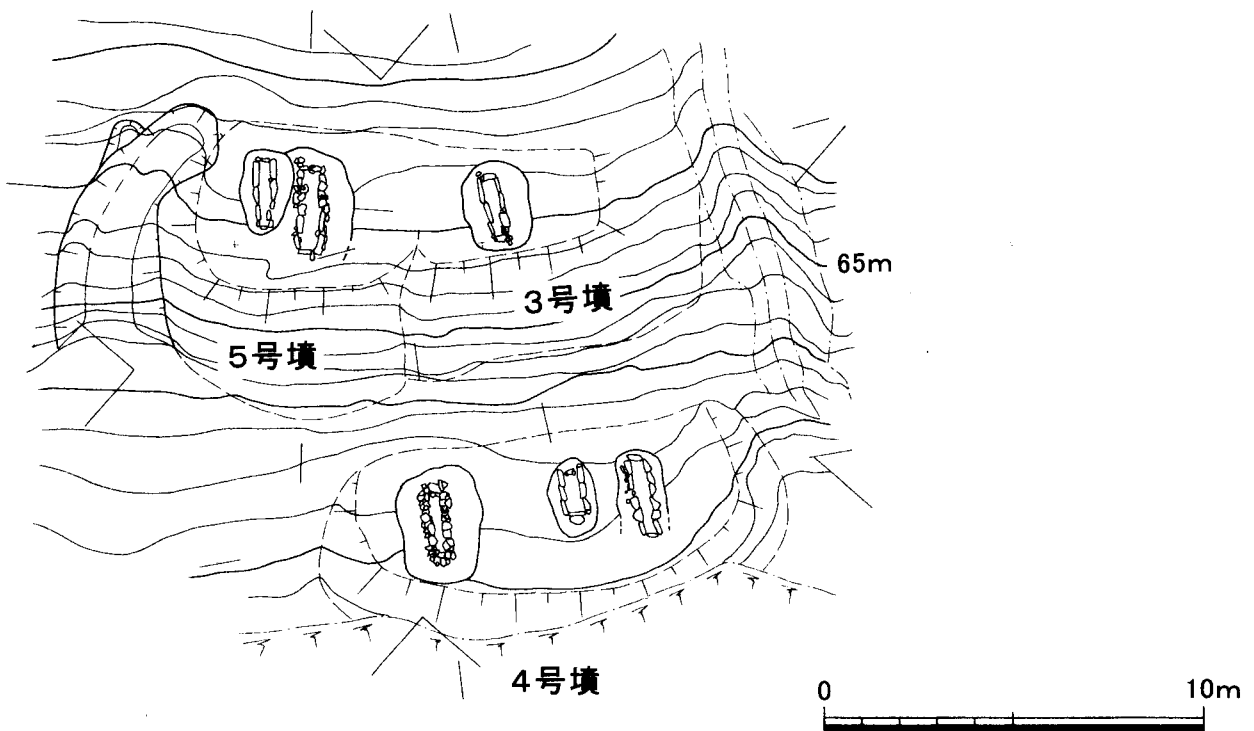
3号墳の北隣に接して見つかった古墳です。斜面を方形に削りだし、その上に盛土をおこなってつくられた古墳で、3号墳ができた後に築かれたようです。墳丘^{ふんきゅう}の北側には、周囲の地形と古墳とを区画する溝^{みぞ}(周溝^{しゅうこう})もみつかりました。

古墳の上には、尾根筋に平行して築かれた箱式石棺^{はこしきせつかん}が2基並んでいました。石棺のなかからは鉋(やりがんな)が1本みつかりました。

一国山3～5号墳の築かれた時期は、今のところはつきりわかりません。しかし、1号墳や2号墳とは離れた位置にあり、また、被葬者^{ひそうしや}の頭の向きや、石棺に使われた石の形も、1号墳とは違っているところから、1号墳に直接つながる古墳ではないようです。



一国山古墳群



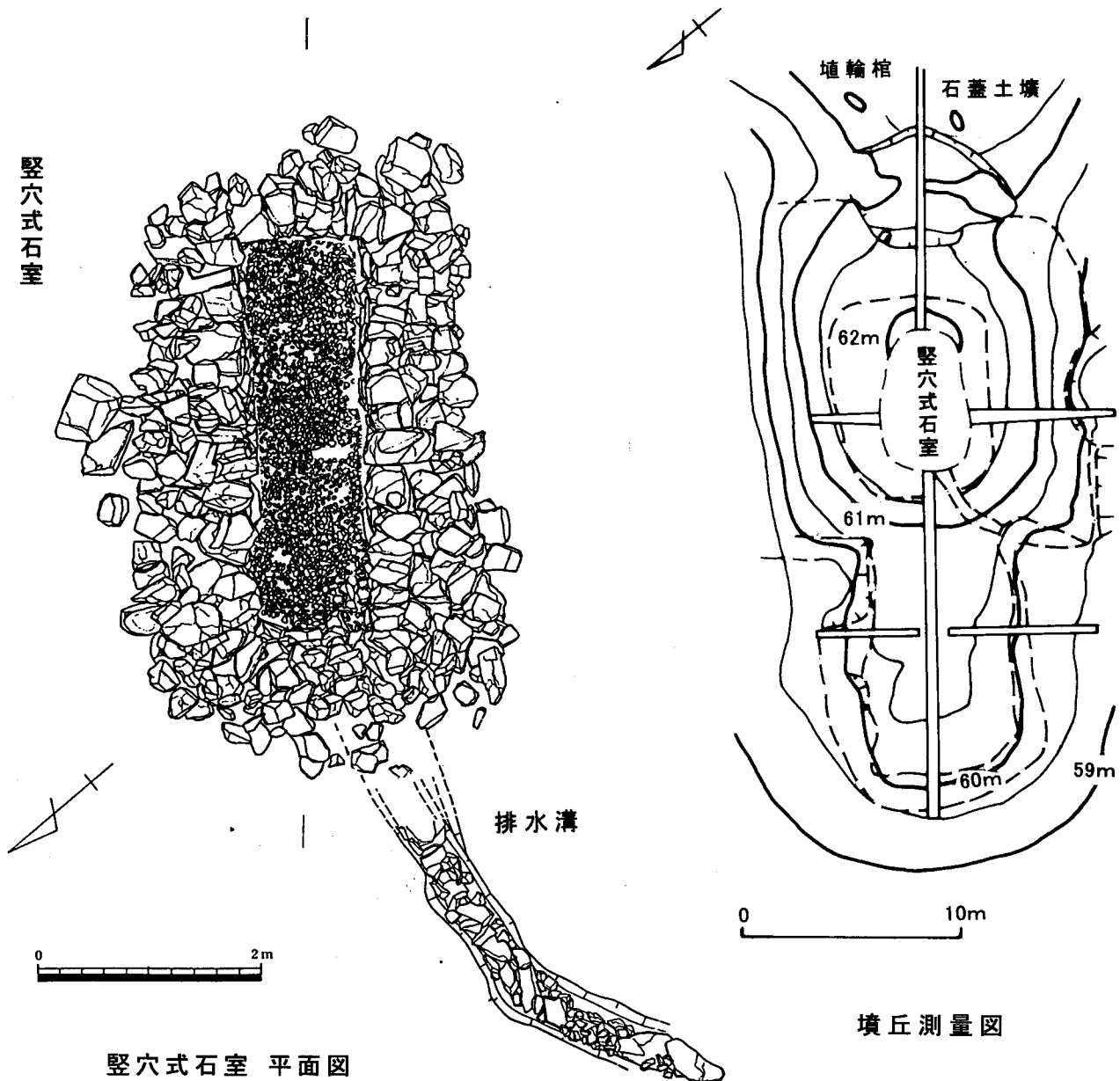
みなみさかはちごうふん
南坂8号墳

岡山市下足守

岡山市教育委員会では南坂8号墳の土取事業に先立ち、平成14年度と16年度に調査をおこないました。14年度の調査では埋葬施設や古墳の上に造られた遺構の調査を、16年度には墳丘や古墳周囲の遺構、そして古墳の下に造られた遺構の調査を行いました。以下16年度の調査で発見された遺構の説明を行います。なお今回展示している遺物も、16年度の調査で出土したものです。

●南坂8号墳

岡山市下足守の、標高60mほどの尾根上にある、長さ27mの前方後方墳です。後方部には、長さ3.7m幅1.1mの竪穴式石室があり、中にたまった水を墳丘の南側へ排水するための暗渠が造りつけられていました。遺物は管玉が1点出土しただけで、古墳の造られた時期ははっきりしませんが、墳丘の上に古墳時代前期の墓が築かれていることから、少なくともそれ以前の古墳時代のごく初めに造られた古墳と考えられます。

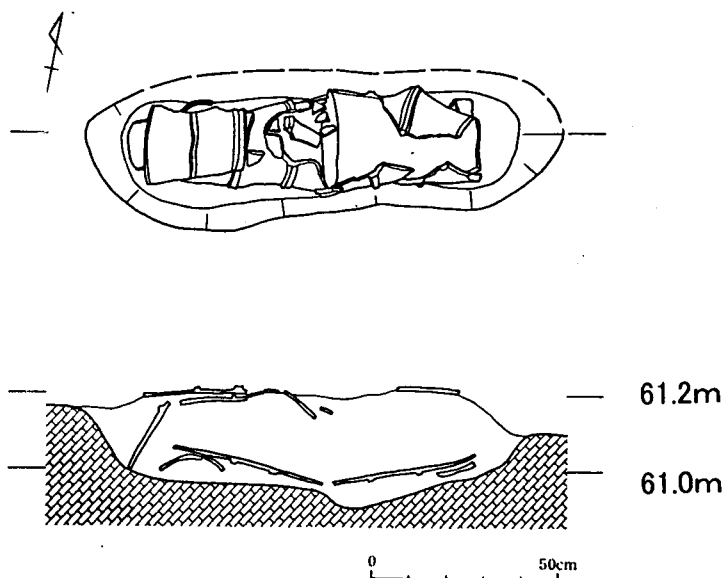


竪穴式石室 平面図

墳丘測量図

◇埴輪棺

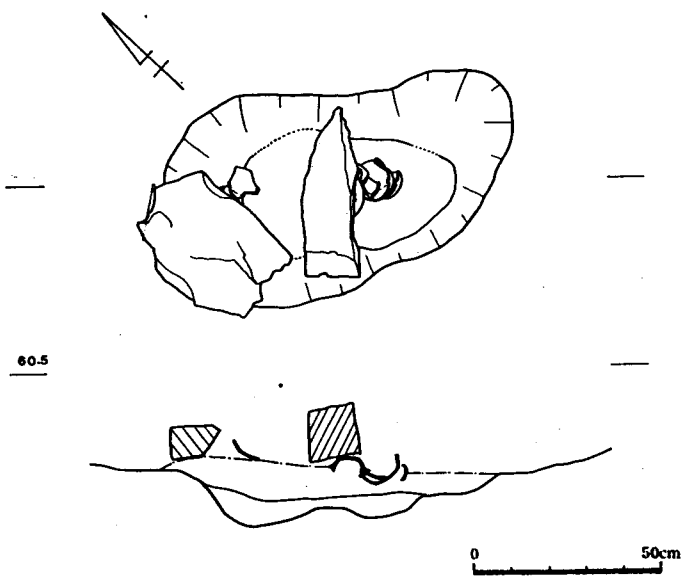
後方部の端から、約5m北側で見つかった、円筒埴輪を棺に転用した埋葬施設です。長さ1.3m幅0.6mほどの細長い穴を掘り、その中に長さ40cmくらいの円筒埴輪を3本、縦につないで埋葬していました。副葬品はありませんでしたが、埴輪の年代から、5世紀の終わりから6世紀の初めにかけての埋葬施設と考えられます。埴輪は南坂8号墳のものではなく、他の場所から運んできたものと思われる。



埴輪棺 (S=1/20)

◇石蓋土壙

後方部の端から約5m東側で見つかった、埋葬施設です。埴輪棺からも、北西に約5m離れています。長さ1m幅60cmくらいの楕円形の穴を掘り中に亡くなった人をいれて、石で蓋をしていたと考えられます。中には須恵器の杯蓋と杯身が副葬されていました。この須恵器の時期から、6世紀中頃の埋葬施設と考えられます。



石蓋土壙 (S=1/20)

◇弥生時代の遺構

南坂8号墳の墳丘を取り除くと、その下から、中に土器の破片が入っている穴が、何カ所かみつけられました。これらはここに古墳の造られる前の時代の、人々の生活の跡です。土器は、弥生時代中期後半と後期後半のものがあり、少なくとも2つの時期、人々がこの尾根の上で活動していたと思われます。ただし住居跡が見つかっていないので、村はずれのような場所だったと考えられます。

今回の調査結果と平成14年の調査結果とをあわせて考えると、南坂8号墳が造られたこの尾根の上は、弥生時代中期後半から人々が活動を始め、古墳時代の初めに南坂8号墳が造られた後は、7世紀初め頃まで点々と埋葬施設が造られる、墓域であったといえるのではないのでしょうか。

東岡山(市道)遺跡

岡山市下

今回の発掘調査は市道建設に伴って、平成16年9月から平成17年1月までおこないました。調査面積は約1,500㎡です。

調査対象となっている東岡山遺跡は、かつて土器が採集されたということだけで発掘調査などはおこなわれたことはありませんでした。しかし周囲には、備前車塚古墳、山王山古墳などの著名な前期古墳が築かれており、弥生時代以来の集落遺跡である雄町遺跡、乙多見遺跡などがあります。さらに北には備前国府の推定地もあり、この地域が古くからの中心地であったことがうかがわれます。東岡山遺跡もその一部であった可能性が推測されます。

発掘調査の結果、弥生時代前期、古墳時代(今から1,500~1,700年前)、室町時代(今から約500年前)、江戸時代の集落が見つかりました。以下、時代ごとに遺跡の変遷を説明したいと思います。

●弥生時代前期

今回調査した地点は、西側に広がっていく集落の端部に相当します。検出された遺構は、溝と土壌だけで、数もそれほど多くはありませんでしたが、いずれも前期のなかでも前半の時期に相当するものでした。この時期の遺跡の数は少なく、吉備の弥生時代のはじまりを告げる貴重な遺跡といえます。

●古墳時代

弥生時代前期と同様に、集落の西端に位置します。しかしながら、数多くの遺物が出土しており、調査区の西側にはかなり大きな規模の集落が存在していると思われます。検出された遺構は、竪穴住居、土壌、溝、井戸等で、とくに井戸からは完全な形の土器がまとまって出土しており、何らかのお祭りがおこなわれたことがうかがわれます。

●室町時代

古墳時代以降の土器も出土していることから、規模の大小はあっても集落は営まれていたようです。発掘調査によって集落の様子が明確となるのは室町時代に入ってからです。調査区の中央(Ⅱ区)にあった集落が中心となって今も周辺の水田を潤している山手川の開発をおこない、その開発によって周辺に新たな集落(Ⅰ・Ⅱ区)が成立したことが明らかとなりました。この時期の水田開発と集落の関係に関する事例は少なく、極めて興味深い資料といえます。また、この時代の集落が現在の集落へと直接つながることもわかりました。地域の歴史を語る貴重な事例といえます。

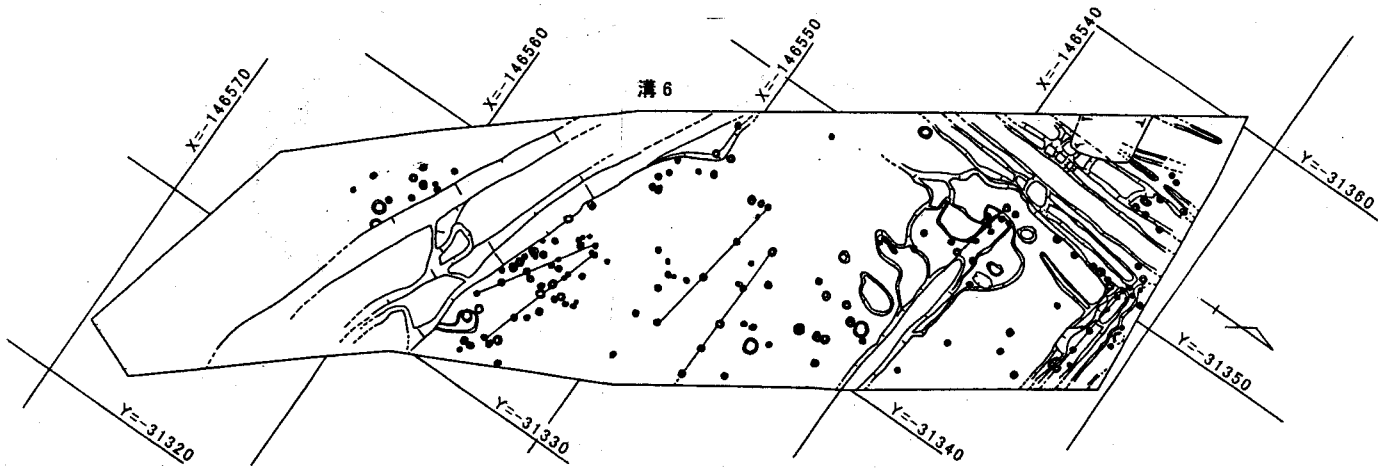
●江戸時代初頭

室町時代の大規模な水田開発を経て成立した集落が、江戸時代に入ると解体していき、調査区中央(Ⅱ区)の集落に統合されていきます。これが現在の集落と殆ど重なることから、室町時代の集落が統合されて現在の集落になったことがほぼ明らかになったといえます。

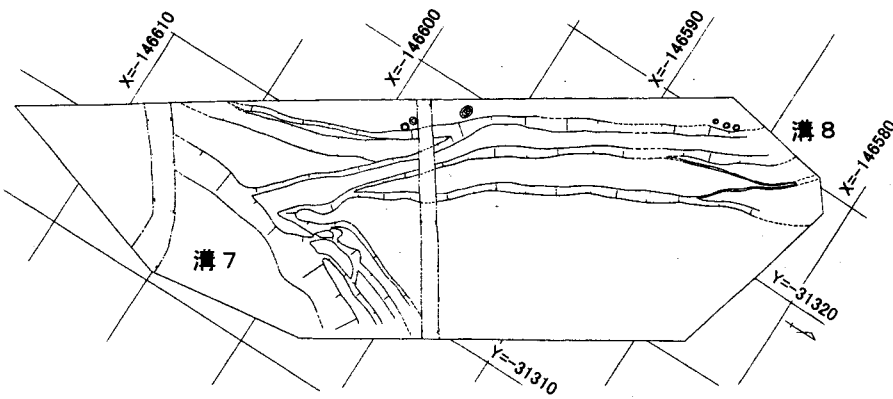


古代の東岡山遺跡周辺

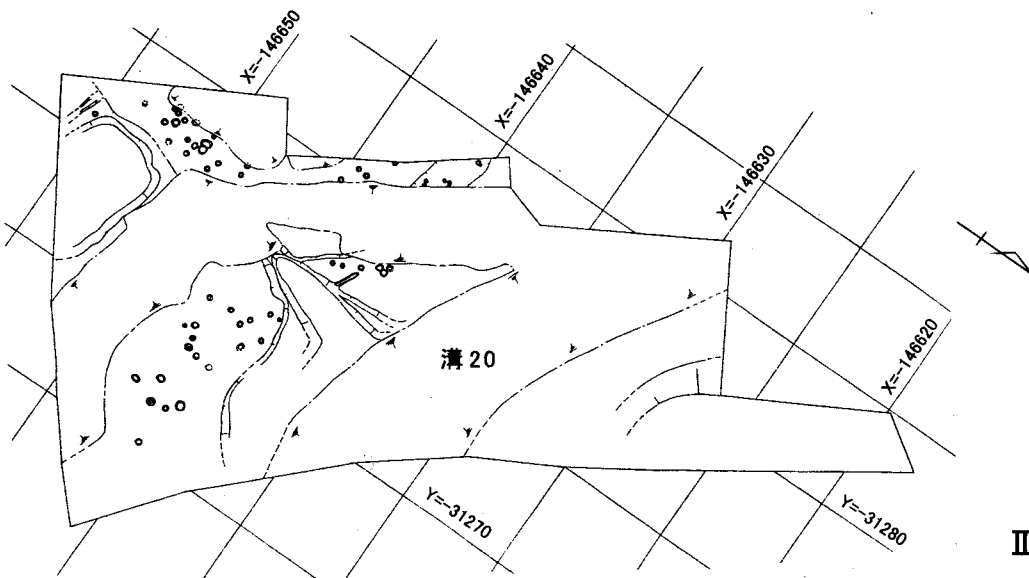
中世後半(15~16世紀)遺構配置図



I区

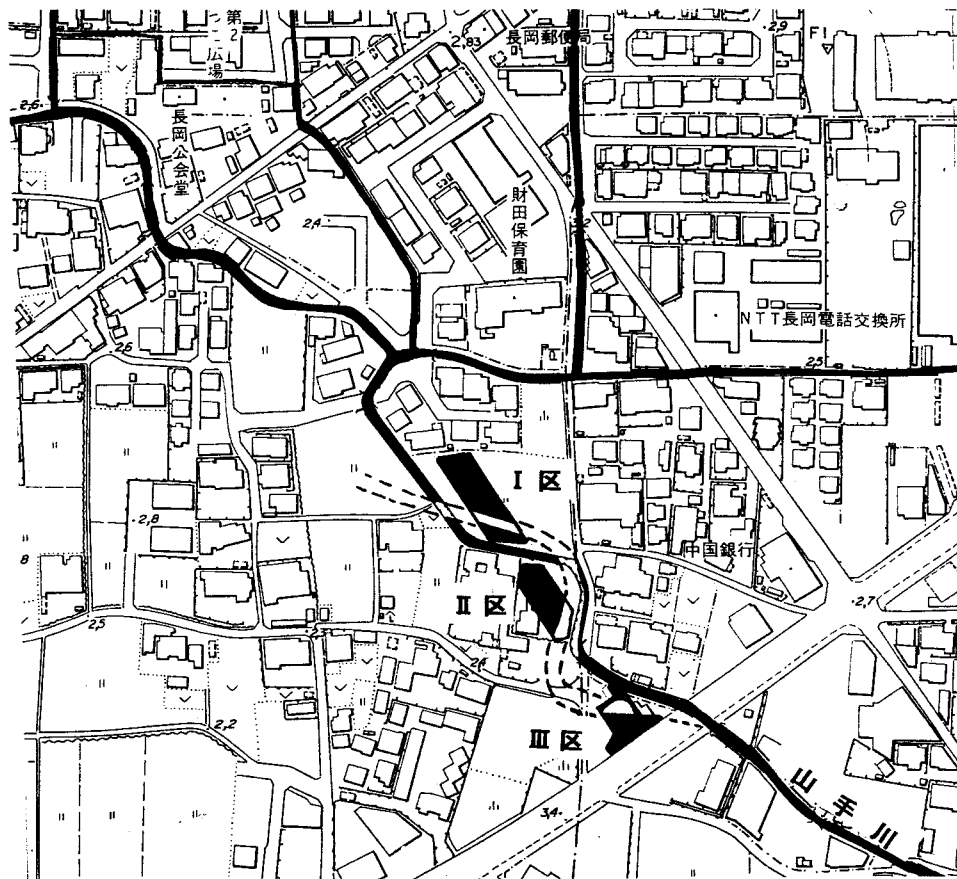
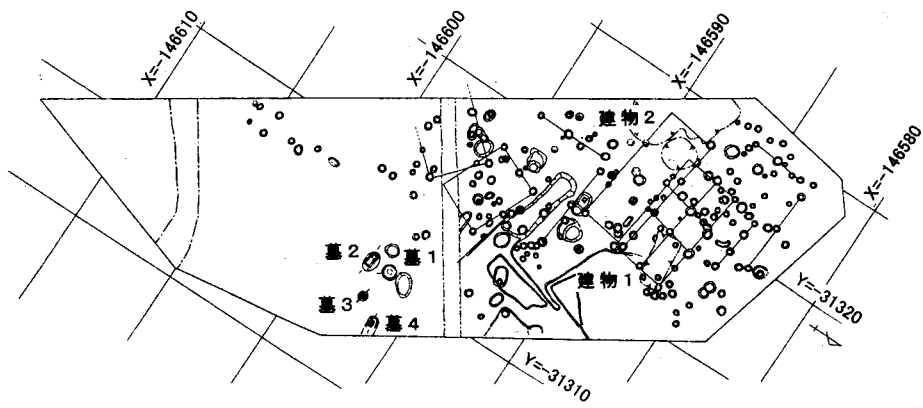
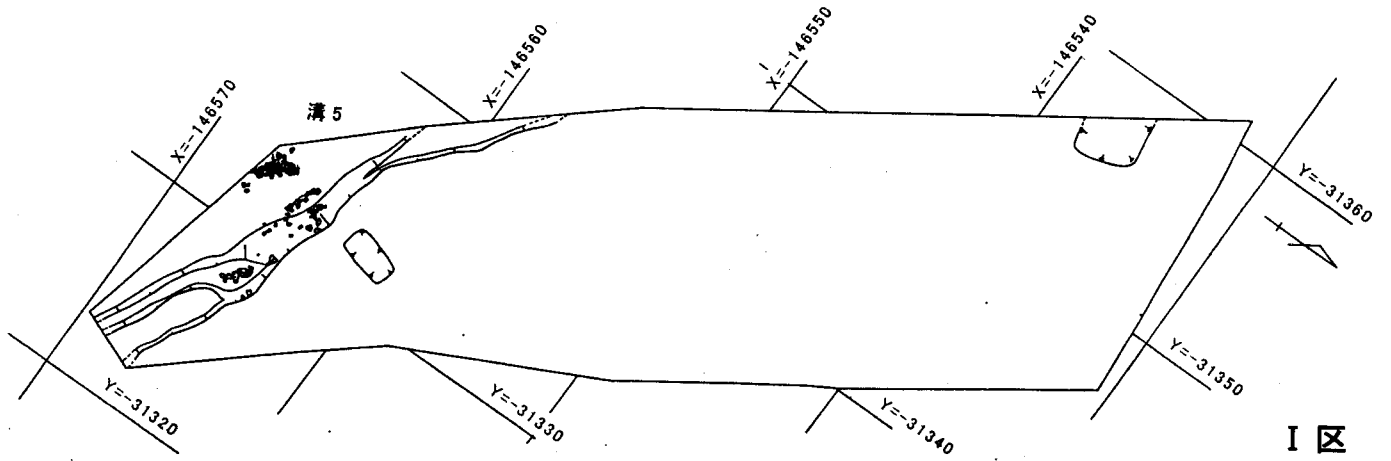


II区



III区

近世初頭(17世紀前半)遺構配置図



周辺の用水路と溝6・溝7との関連

彦崎貝塚

岡山市灘崎町彦崎

標高約5mの小規模な海岸段丘上に形成された、縄文時代の早期から晩期(およそ8,000~3,000年前)の貝塚遺跡です。昭和23・24年に東京大学人類学教室により発掘調査がおこなわれ、約30体の縄文時代前期ごろの人骨と共に多量の遺物が出土しました。人骨の中にはお腹に赤ちゃんがいる女性のものや、頭蓋骨を三角形に並べたものなどもありました。また、縄文土器は、山内清男博士によって縄文前期彦崎Z I・II式、縄文後期彦崎K I・II式と命名され、この時期の瀬戸内地方の縄文土器の基準の資料となりました。

55年後、本市(旧灘崎町)では、史跡整備に先立ち平成15・16年度に現地調査を実施しました。2カ年の確認調査では実に多くの成果が得られ、最大の成果は、遺跡の保存状態が極めて良好であったことです。

〈前期〉 この時期に遺跡の規模は最大で、東西約80m、南北約100mの環状の集落でした。また貝塚の規模も前期の時代に限定すると、西日本では最大規模の部類に入ります。貝塚はカキが主体で最も厚いところでは約1.7mも貝が堆積していました。他には、土坑、ピット群、炉址、焼土面、イノシシの頭蓋骨を埋納した土器が検出されました。

土器に関しては、

時期	新しい	古い
	彦崎Z I 式←磯の森式←羽島下層式←無紋繊維土器←粗大楕円文	
土層	上	下

と層位的に明確に分かれて出土しました。

また、土の中からイネ等の植物珪酸体(イネ科植物の葉の中にあるガラス質の細胞)もみつかっています。

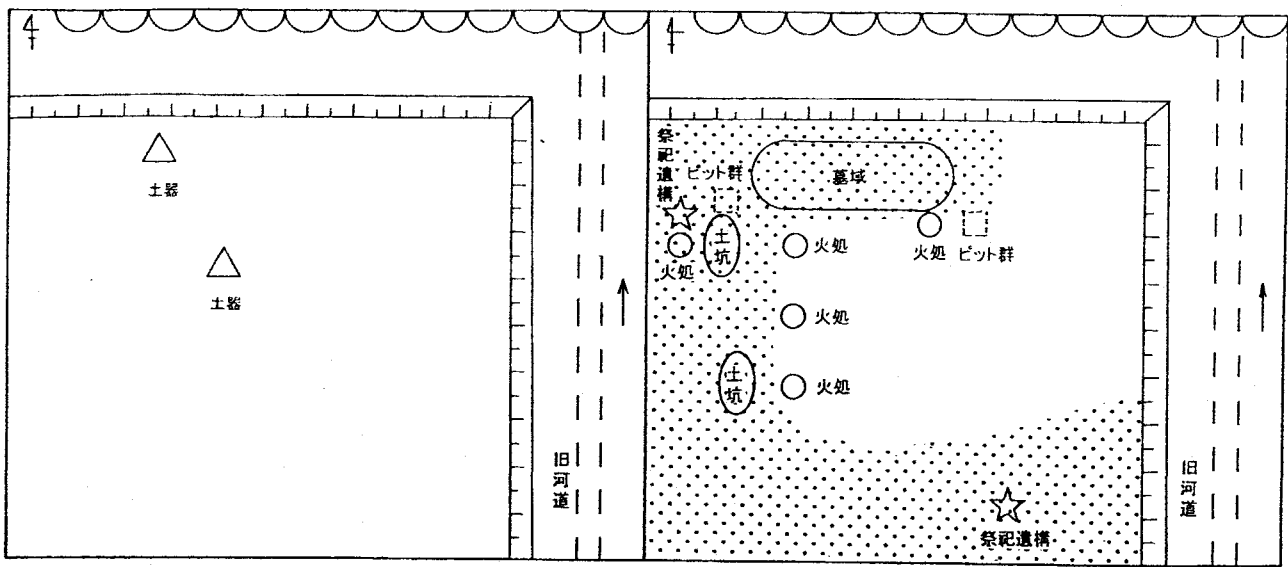
〈中期〉 貝塚(カキ)、埋葬人骨(土壌墓)+祭祀遺構、土坑が検出されました。特に中期の埋葬人骨群が検出されたのは注目されます。

〈後期〉 貝塚(カキ)、埋葬人骨(一部)、土坑、ピット、イノシシやシカの頭蓋骨を埋納した土器、どんぐりなどなどを貯蔵した穴が検出されました。

〈晩期〉 貝塚(ハイガイ)、土坑、埋葬人骨(一部)が検出されました。結晶片岩でできた石棒や赤色顔料の付着した磨石、石皿、原材料?などの石器類も出土しています。

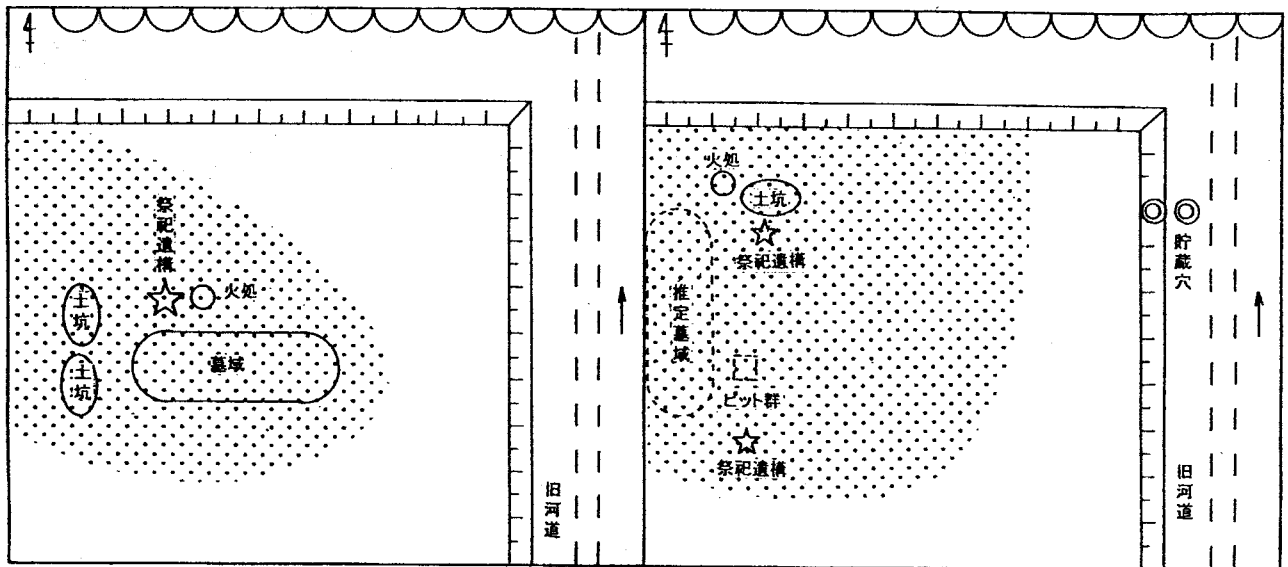
また、全時期を通して、搬入(他の地域から運ばれてきた)土器や、いろいろな石器、動物の角や骨などでつくったアクセサリーなどもたくさん出土しました。

遺構の時期別変化を追ってみると、墓域を意識して各遺構が配置されているようです。それは、たとえば、目印となるものがそこにあったからかもしれません。石棒や祭祀遺構の存在も興味深い事実です。



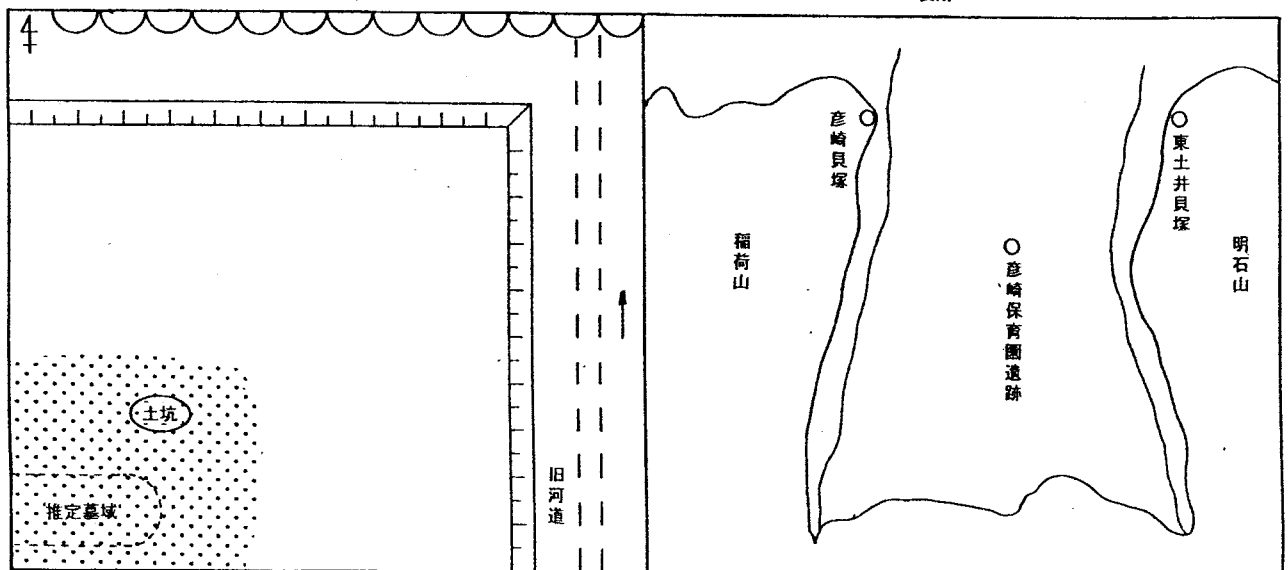
1. 早期

2. 前期



3. 中期

4. 後期



5. 晩期

時期別遺構模式図 (網掛部は貝層)

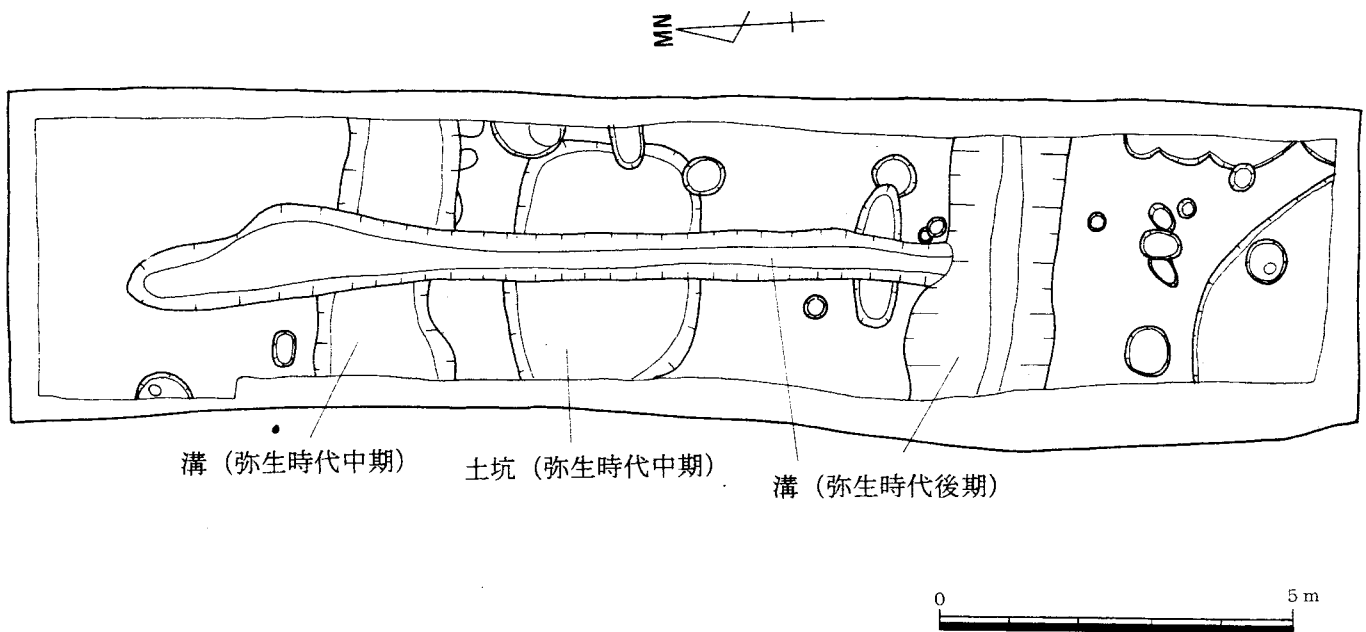
兼基遺跡

岡山市兼基

兼基遺跡はマンション建設に伴って発掘調査を行いました。この遺跡は旭川東岸の平野に位置しており、これまでに百間川の改修に伴う調査で、弥生時代の大型掘立柱建物群が検出されたほか、多量の弥生土器やガラス滓などが出土しており大規模な集落が広がっていたと考えられています。また、この遺跡の南側の丘陵谷部では3個の銅鐸が出土しています。

発掘調査はマンションの浄化槽部分という小範囲に限定されたため遺跡の全体像はつかみにくいものの、調査地点での遺跡の盛期が2時期あることが判明しました。ひとつは弥生時代中期で溝や土坑などから壺、甕、高坏など多量の土器や分銅形土製品、サヌカイト片が出土しました。また、弥生時代後期の溝からは壺や甕、鉢、高坏などの土器が出土しました。

今回の調査は限定された範囲ながら周辺での過去の調査成果とも合致し、弥生時代中期から後期に繁栄した集落の一角を垣間見たと見えそうです。



兼基遺跡調査区平面図